慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史學科春期研究旅行記
Sub Title	
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1942
Jtitle	史学 Vol.21, No.1 (1942. 9) ,p.114- 117
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19420900-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

史學科春期研究旅行記

昭和十七年五月十七日（日）

三島、伊豆山兩神社に恒例の春期見學旅行を行つた。伊木先生指導の下に、一行は間崎、松本（芳）松本（信）、今宮の四教授、宮島講師、清水先輩、學生十九名、都合二十六名といふ稀に見る多人數である。東京驛午前八時發沼津行の列車にて出發、石橋山古戰場を窓近く見、熱海を過ぎ丹那トンネルを拔けるとすぐ右手に、故田中萃一郎先生の生家が見えた。かくて同十時三十二分、薄日洩れる三島驛着、富士の白雪旭に溶けて流れると歌に有名な水の町三島の餘りに清い蕩々たる流れに今更の如く感歎し、古來東海道の要驛たりし所以の歴史地理的說明等を聽きつつ、流れに沿つて徒步約十分、三島神社着。

正式參拜を終り、今は一般には公開しないと云ふ寶物館に入館し、各自自由に見學する。此處に陳列されてゐる古文書類は盜難用心のため全部寫眞であつたが箱根を控へ、政治交通の要地であり、鎌倉幕府を始めとし、世人の尊崇を受けた神社だけに、頼朝下文、尊氏寄進狀、伊勢宗瑞刀奉納狀、三島曆並に其の版木等が

出品されてあつた。その他國寶の尼將軍政子の蒔繪櫛笥、刀劍等は館內に陳列されてあつたので、したしく見ることが出來たのは幸であつた。學生本阿彌光博君に刀劍の說明を聽いたが、父光遜氏直傳の同君の語る所に依れば、陳列棚の最上部に掛けてある秋義の小脇差と、一文字宗忠の太刀との二本が主要なもので、手に取つて拜見する事が出來ず、詳細は解らぬが、秋義は長さ一尺二寸五分、相當に反りも强く、相州物の持つ華やかさを備へたものである。秋義は有名な正宗一門の秋廣の弟子と云ふ事になつて居るから、所謂相州傳の最盛期、應安頃の人で、其の作品は非常に珍らしく、現在我國に於ては、恐らく此の一本のみであらう。尤も秋吉と銘を切つた物は時として見受ける事もあるが、これとても少ない。その地鐵や刄の健全さは仲々立派なものである。表の下に棒樋に添樋を彫り、その上に蓮華を深く彫つて居る。その中心（ナカゴ）の錆の色も良く、表に相模國住秋義、裏に伊豆三島大明神奉拜、佐藤松千代貞成とある。此の樣な作品の世に珍らしいと云ふ事からであらう、大正九年四月十五日、國寶に指定された。

次に宗忠の太刀は、もと當社にあつた北條氏奉納の菊御作を、明治天皇の御所望により、獻上申し上げた代りに、宮內省から下賜されたと云ふ物である。寸法は二尺四寸三分で、身幅はその割に狹い樣に思はれ、直刄丁子と云ふ刄文で、優しい上品なものであるが、その働きにはもう一息と云ふ所がある。大體備前の一文字と云ふ刀工は同國の福岡、或は又吉岡に住んだ者が多く、此の宗忠は福岡派であるが、此の一派は大丁子亂といふ華やかな刄文

を焼く物が多く、吉と宗の二字をその名に有する刀工の作品は、姿に於ても刄文に於ても優しい物が常である。此の宗忠もその例に違はず優しいものである。承元時代のもので地鐵は非常に細かく、一點の傷も無く能く保存された立派なものである。太刀銘に古雅な書體で宗忠と二字に銘を切り、表裏共に棒樋があり、角止めになつて居るが、その姿の上品さ、樋の上手さは全く凡工の爲し得べからざる所で、一見上品な山城物とも見える。難を言へば、少し身幅の狹い事、卽ち姿の弱い事であるが、地刄の良さはこれを補つて餘りあるものと言へる。此の太刀は明治四十五年二月八日に國寶に指定されたものである。此の二本の外の二十本許りのものは、江戸の水心子正秀や大慶道胤等の新しいものが多い。珍らしいものとしては、正倉院御物に多い片切刄造りと、小烏造りの模造であるが、此の二種の型は奈良時代の刀の主要なもので、大元帥陛下の御佩刀は小烏造りと拜聞して居る。又七八尺もある樣な太刀が掛けてあるが、これは何處の神社に行つても多いもので、實用に供したものではなく、新しい出來の惡い物が多い。尙、此等の外に貞治三年裏銘の豐後高田友行の國寶の小脇差は、鎌倉の國寶館に出陳中との事で、見る事の出來なかつたのは殘念であつた。

館內一見後、社務所に於て特に古文書の實物を見せて戴く事が出來た事は、伊木先生の御蔭であり、又先生より色々と實物に就ての詳細な說明は、講義の時とは別な意味で我々の爲に非常に喜ばしい事であつた。

此心經一卷、爲病腦祈願、染愚筆謹拜書、奉納三島神社者也、

建仁二年八月十日　從二位源朝臣頼家

の奥書ある將軍源頼家の般若心經の如き、數少き頼家の文書中、唯一の般若心經ではないかと考へられる。そしてこの一卷により薄幸將軍の心中を今にして察することが出來る心地がする。

更に

寄　進

伊豆國安久卿事

右爲天下泰平所願成就、奉

寄進之狀如件

延元三年正月七日

横中納言兼陸奥大介鎭守大將軍源朝臣（花押）

とある吉野朝の忠臣北畠顯家寄進狀は、青年將軍顯家が奥羽の官軍を率ゐて再度西上の途次、賊將斯波家長を鎌倉に滅し、正月二日此處を發して東海道を進軍するに當り、同月七日本社に參拜、天下泰平、所願成就の祈請を籠めまつゝた時のものであり、殊に間もなく、五月二十二日には護國の華と散つたのであるから、たとへ言辭は簡單であつても、一讀吾人の肺肝に徹するものがある。なほ本書にある顯家の花押は、敵將尊氏の花押と共に形體の整つた花押で、此の點に於ても兩者の對立を示して居るところなど、特に我々の眼を引いた。其の他、沙門遍照金剛空海の中臣祓解除、神口決、日本國大神二十一社爲本社守護、各一卷並に有名な、應永三十五年六月一日寫の、三島日本書紀三卷等は、前記寫經、文書と共に、當社の神宮中にすら初見の人々があつた程の祕什である。また床間の當社古圖は寛永年間のもので、神佛混

滄時代の盛觀を偲ぶに足るが官幣大社の現時と對照して、更に今昔の感深きものがある。社務所で晝食を攝り、數々の拜觀に一同大いに滿足し、午後一時十分、當社を辭した。三島神社に於ける盛澤山の寶物と厚遇とで意外に時間を費したので、國分二寺の遺址等の見學を割愛し、再來を期して三島驛に急行し、同一時二十四分同驛を發して東に向つた。

午後一時四十五分熱海驛に下車、怪しくなりかけた空模樣を氣にしつつも、特にアスファルトに美して補裝された街道を避け、山の中腹をうねる舊道を取つて伊豆山に向ふ。相當急な坂をやうやく登り切れば、眼下に相模灘の美景が忽然と展開し、歌人實朝の萬葉調に思ひ出される伊豆の初島も指呼のうちに見られて、我々を樂しませてくれる、晴天なれば更に海上遠く御神火の煙棚引く大島を望み得、雄大な風景を樂しめるのであるが、今日は生憎曇天で殘念であつた。

背に輕い汗を感じ、頰に潮風を受けつつ、曲折多い道を歩く事約三十分、明治維新の際、神佛分離に依り伊豆山神社より分離した舊別當寺の般若院に立寄つた。然し伊豆山神社の御神體であつたと傳へられる國寶神像は、目下帝室博物館に出品中との事で、遺憾乍ら拜觀することが出來ず、そのまゝ程近き伊豆山神社に至る。

參拜を終り、寶物館に於て寶物を拜觀する。その主なものは

永久五年丁酉八月四日己未僧良勝
　　戍祐橋氏

の銘ある八蓮辨の經筒を始め、懸佛、鏡、土器等、當社裏山經塚出土品、及び、平政子の頭髮を以つて作られたと傳へられる法華曼陀羅等であつた。政子と伊豆山との關係は深く、政子の御經師法音尼も當社に住し、又石橋山合戰の折には、政子自身文陽房覺淵の坊に隱れ、夫頼朝の安否を氣遣つて居た事もあつたと云ふ。從つて此の樣なものが傳へられたとしても、敢へて不思議ではないわけである。

綠松の間に白砂の海岸を見下す景勝の位置に在る社務所は、急坂を登つて來た我々の疲れを一時に忘れさせるに充分であつた。此處で又特に持ち出された古文書等をゆつくり拜見する。

國寶後奈良天皇御宸筆の般若心經は、先年伊木先生發見のものであり、天文九年、飢饉疫癘流行の折、これの一日も早く止み、民草の安からむ事を御宸念遊ばされて、畏くも宸筆を染めさせられて、諸國の一宮に奉納し給うたもので、皇室のいつに變らぬ御仁慈の程が偲ばれて、洵に有難き極みである。尙此の諸國へ下された御宸筆の般若心經は紺紙金泥の立派なもので、現在三河、甲斐、信濃、伊豆、安房、越後、周防、肥後等のものが發見されてゐる。中には國名の記されて無いものもあるが、當社のものは立派に伊豆國と御奥書があり、一段と價値を高からしめてゐる。又

萬治二年彌生二十五日
　　御走湯山書之事
　　吟松軒（宗因印）

の奥書ある走湯山緣起　及び

元祿代寅秋九月朔雒後學山岡文希本敬識

と奥書ある伊豆山紀等も面白い。

更に經塚出土品の一たる、綱文飛雀鏡を見た。鏡面に

十一人僧永祐

承安二年十一月十一日

藤原景行芳助平氏

相州下毛利

とある珍らしいものである。

午後三時二十分當社を辭し、六百段近い石階を下りて熱海街道に出た頃には足下が危くなつて居た。熱海街道を歩く内、併木先生、清水先輩を乘せた滿員のバスが木炭の煙を殘して、我々を追ひ拔いて行つた。

同四時、熱海驛前着、夕食迄の一時間を自由時間とし、各々熱海町を逍遙する。私は併木先生の御供をして、驛前の中見世を拔け、横磯海岸に出、技振りの面白い老松の傍に、かの金色夜叉の碑が立派に立てられてゐるが、これも或は明治文學史の史蹟と云へない事はあるまい。更に熱海銀座を拔け、遠く海藏寺境内の文豪坪内逍遙の墓に詣で、天然記念物の梛の大木も見學した。かくて一同思ひ思ひに湯の町の氣分を味つた後、夕食を共にして午後六時八分、小雨降り來つた熱海の町を出發、歸京の途についた。

此の日は決して好天氣とは云へなかつたが、雨に妨げられる事なく、無事樂しい見學旅行を終へる事が出來たのは喜ばしい。

終りに臨み、我々の研究に對して絶大な便宜を與へられた三島、伊豆山兩神社の御厚意に深く感謝する次第である。

（河北展生記）